



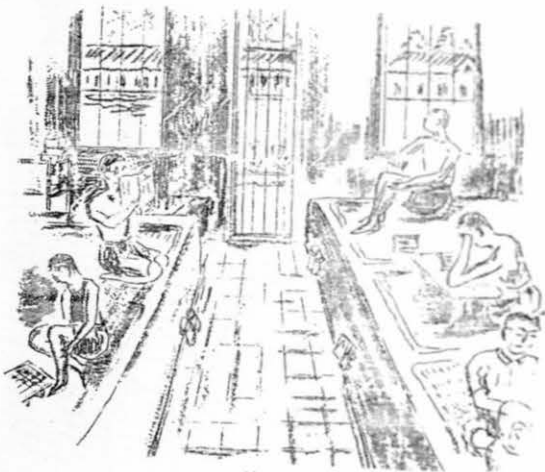


前ページ 満州大連時代の源治（昭和十二年、二十一歳のころ）。

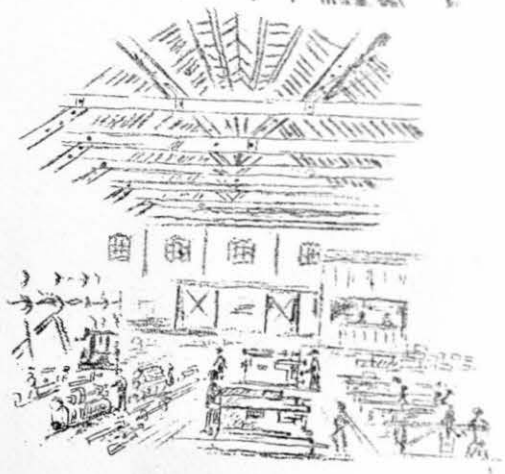
右上 愛宕尋常高等小学校卒業の記念写真。三列目の一番左が源治。

右下 源治が出征した後の佐藤家の人びと。左から妹ナツ、父善次、弟吉次、母キクエ。

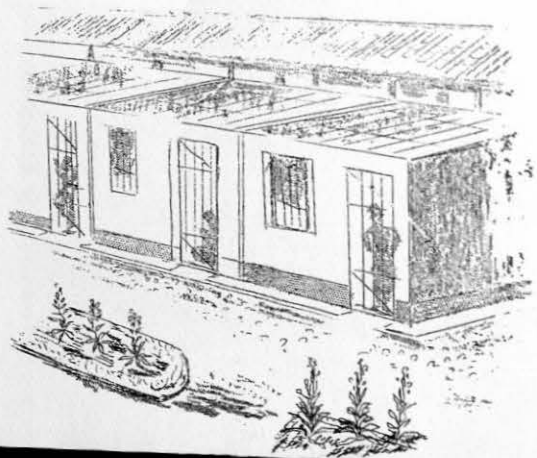
上 剣道大会で優勝（青年団時代、昭和十年ごろ、左が源治）。



雑房の午後。



刑務所内の鉄工場。チビナン刑務所には、鉄工場、木工場、縫工場、網工場、製材所の五つの工場があつて、その整備、規模、生産能力はジャワ島随一の大工場であり、三千人にあまる囚人により運転されていた。

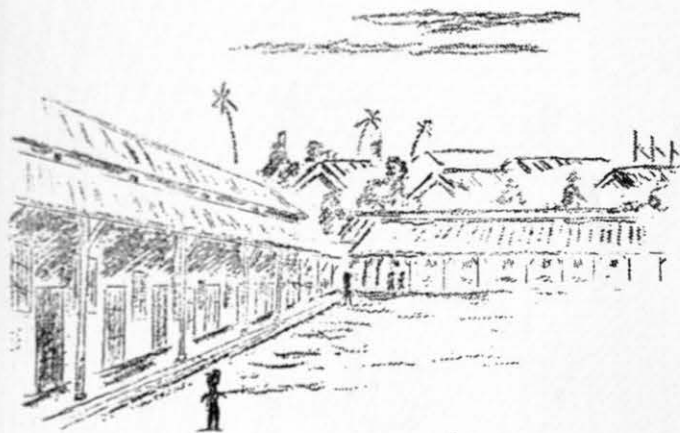


独房。裁判を終えて死刑を求刑された者は、その日にこの独房に移される。以来、死の影を追って悲しい生活が始まるが、雑房とは遠く離れているうえ、扉をもって区切られているので、まったくほかの日本人との交渉が絶たれる。

ジャワ島バタビヤのチビナン刑務所（児玉京一編集「試験のアルバム」在巢嶋広島県人会茶園義男編「日本B.C級戦犯資料」不二出版より）
チビナン刑務所正面。



日本人監房。棟に定員二十五名の雑房が二十部屋並んでいる。毎朝五時起床、開扉されるが、七時の作業始めまでに食事を終え、作業場に行くころ、ようやく夜が明ける。



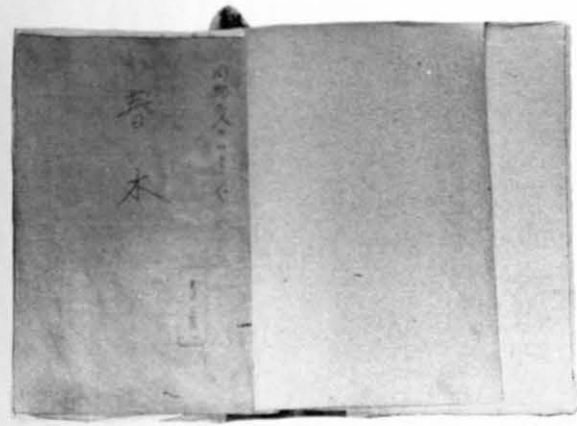
朝の風景、便所。





佐藤源治遺稿集の原本。
「獄中記 獨房獨想」表紙。

同郷の人々にささぐと題書された「春木」表紙。これは煙草の巻紙の用紙に書かれたものである。



遺稿集の主なもの。小型本は「春木」。



防諜ニ注意セヨの文字が見える陸軍の軍用野紙に書かれた「死刑囚の一日」原本。



捨てられた反故に書きとめられてある「獨房獨想」。



検閲の印の見える原本。
後ページ 最後の年、憲兵曹長の源治 昭和二十三年、三十二歳。

■ジャワ獄中記■目次■

まえがき 菅原実 1

第一章 任 務

- 一 満州守備隊から憲兵に 10
- 二 つねに皇軍の儀表たれ 15
- 三 大連で偽憲兵を逮捕する 19
- 四 野戦憲兵隊編制で軍曹に 22
- 五 大戦勃発、ジャワのスラバヤへ 26
- 六 無能、オランダスバイ 32
- 七 私が檢舉した主な事件 35

第二章 落 陽

- 一 日本敗戦、連合国より治安維持を命ぜらる 54
- 二 蜂起する独立義勇軍との武力衝突 61
- 三 トロアゴンで投獄、チャンギーからチビナン刑務所へ 74
- 四 チビナン刑務所、突然スラバヤ行きを命令 81
- 五 オランダ、スラバヤ憲兵隊四名に死刑求刑 91

第三章 独 房

- 一 戦犯死刑囚の一日 96
- 二 独房の夜 101
- 三 死刑を覚悟し、和歌・俳句を習う 104
- 四 俳句と心の鍛練 107
- 五 和歌は今日を立派に生きる糧 110
- 六 稲 妻 112

七 望 郷 113

八 僕は唱歌が下手へたでした 116

九 故郷ふるい蓬萊山さいざんの藤の花を想う 117

十 東北農村の青年男女に寄す 119

第四章 死 生

一 石床の綿毛布 128

二 自分は極刑に値する戦争犯罪人なのか 130

三 友を選べぬ寂しさ 131

四 この世に神仏はあるのか 133

五 死後の世界は果してあるのか 136

六 どうすれば仏の心境になれるのか 139

七 死刑囚への慰問演芸 142

八 かぎりなく祖国を想う 144

九 蝶々よ、さらば 148

十 先に散った村上博海軍大尉に捧ぐ 151

十一 父の手紙に寄す 153

十二 父よ母よ、心安んぜられよ 156

十三 歎願書を出してくれた故郷の人びとへ 159

十四 幼なじみの佐々木誠一君に託す 166

十五 獄 夢 168

十六 父と母への遺書 170

十七 絶 筆 172

解 説 菊池日出海 181

あとがき 菊池日出海 217

佐藤源治年譜 219

凡 例

- 一 遺稿原題は「獄中記 独房独想」「獄中記」(その一、その二)「春木」だが、表題は『ジャワ獄中記』とした。
- 一 絶筆、詩、和歌、俳句以外の文章は、生硬すぎて意味の通じにくいところがあり、不本意だったが、ご遺族の許しを得て、原文をそこなわぬ範囲で、文章を一部修正させていただいた。
- 一 一般対象の読物にするために、当て字を改め、現在あまり使われていない漢字の副詞や連体詞、接続詞などは仮名に直した。また漢字はおおむね新字体に統一した。
- 一 本書の構成、見出しは編集のさいに付したものである。
- 一 遺稿原本では、和歌、俳句は一カ所にまとめられているが、読むうえの便宜を考え、一首ずつ編者が各本文の末に付した。
- 一 本文の注記は「」が原著者による注、「()」が編者による注である。

第一章 任 務